

『徒然草』研究

—— 137段について ——

An Essay on the 137th Passage of *Tsurezuregusa* (Essays in Idleness)

土屋 博映

Hiroei TSUCHIYA

一 はじめに

中世を代表する文学作品『徒然草』でもっとも有名な段のひとつとして「137段」があげられる。本段は、本書中、最長の長さを持つ段であり、上下二巻のうち、下巻の冒頭に位置していて、『徒然草』が世間の評判を集めたきっかけとなった段として知られている。しかし、本段のとらえ方については、様々な見解があり、その評価も一定していない。

本段を見直すことは、『徒然草』全体の再評価にもつながることであり、意義あることである。そこで、本稿では、『徒然草』中での、137段を吟味し、そこで確認された問題点をとりあげ、それらにつき、先学の論を踏まえ、さらなる分析を行い、問題点を解明し、さらには本書全体を

貫く、作者兼好の、美意識、もしくは思想にまで迫るきっかけともしたいと考える。

二 137段全文

① 花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情けふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ」とも、「障る

事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるにおとれる事は。花の散り、月の傾くを慕ふ習ひは、さる事なれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見所なし」などは言ふめる。

② 万の事も、始め終りこそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言はめ。

③ 望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる群雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしてみて、心あらん友もがなと、都愁しう覚ゆれ。

④ すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は闇のうちながらも思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。片田舎の人こそ、色こく万はもて興ずれ。花の本には、ねぢ寄り立ち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては、大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手・足さし浸して、雪にはおり立ちて跡つけなど、万の物、よそながら見ることなし。

⑤ さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごと、いとおそし。そのほどは棧敷不用なり」とて、奥なる屋にて酒飲み、物食ひ、

囲碁・双六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、「渡り候ふ」といふ時に、各肝つぶるるやうに争ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾張り出でて、押しあひつつ、一事も見もらさじとまぼりて、「とあり、かかり」と、ものごとに言ひて、渡り過ぎぬれば、「又渡らんまで」と言ひておりぬ。ただ、ものをみ見んとするなるべし。都の人のゆゆしげなるは、睡りて、いとも見ず。若く末々なるは、宮仕へに立ち居、人の後にさぶらふは、様あしくも及びかからず、わりなく見んとする人もなし。

⑥ 何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明けはなれぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなと思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくも、さまざまに行きかよふ、見るもつれづれならず。暮るるほどには、立て並べつる車ども、所なく並みあつる人も、いづかたへか行きつらん、ほどなく稀に成りて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾・畳も取りはらひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひ知られて、あはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。

⑦ かの棧敷の前をこころ行きかふ人の、見知れるがまたあるにて知りぬ、世の人数もさのみは多からぬにこそ。この人みな失せん後、我が身死ぬべきに定まりたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。大きな器に水を入れて、細き穴をあけたらんに、しただる事すくなしといふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて尽きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人、二人のみならんや。鳥部野・

舟岡、さらぬ野山にも、送る数多かる日はあれど、送らぬ日はなし。されば、棺をひさくもの、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れにけるは、ありがたき不思議なり。しばしも世をのどかには思ひなんや。ままだてといふものを双六の石にて作りて、立て並べたるほどは、取られん事いづれの石とも知らねども、数へあてて一つを取りぬれば、その外は遁れぬと見れど、又々数ふれば、彼是間抜き行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、閑かに水石をもてあそびて、これを余所に聞くと思へるは、いとはかなし。閑かなる山の奥、無常の敵競ひ来らざらんや。その死に臨める事、軍の陣に進めるにおなじ。

『日本古典文学全集』¹による。①～⑦は筆者挿入

三 問題点

①について

- 1、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」が本段のテーマ（主題）、ただし、全体をとおしてのテーマと見られるかは疑問。
- 2、「あはれに情ふかし」については、高い評価を示す表現かは検討の余地がある。
- 3、「歌の詞書」を引用しているのはなぜか。

4、「かたくななる人」とは、どのような人か。

②について

5、「万の事も、始め終りこそをかしけれ。」というテーマめいた一文は1とどういう関係にあるか。

6、「男女の情」の例は、典拠があるのかどうか。

③について

7、「千里の外」と表現した意味は何か。

8、「あはれなり」は高い評価を示す表現か。

9、「身にしてみて、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ」の意味は何か。

④について

10、「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは」というテーマめいた一文は1とどういう関係にあるか。

11、「たのもしう、をかしけれ。」はどういった評価を表すのか。

12、「よき人」と「片田舎の人」はどういう人物のことか。

13、「よそながら見ることなし」はどういう評価か。

⑤について

14、「いとめづらかなりき」はどのような評価か。

15、「ただ、ものをのみ見んとするなるべし」はどういう評価につながるか。

16、「睡りて、いとも見ず」はどういう評価につながるか。

⑥について

- 17、「明けはなれぬほど」と「暮るるほど」は何を意味するか。
 18、「をかしくも、きらきらしくも」とはどのような評価か。
 19、「あはれなれ」は高い評価を示す表現か。
 20、「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。」の意味は何か。
 ⑦について

21、「しばしも世をのどかに思ひなんや。」の意味は何か。

22、「いとはかなし」はどのような評価か。

23、「閑かなる山の奥、無常の敵競ひ来らざらんや。その死に臨める事、軍の陣に進めるに同じ。」は本段の最末尾にあるが、冒頭のテーマとの関係はどうなるか。

※以上のような問題点が浮かんた。これらについて、諸説等比較しながら分析し、自分なりの判断・論の展開をしていく。

四 問題点の分析・判断

まずは、①から。

1、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」が本段のテーマ（主題）、ただし、全体をとおしてのテーマと見られるかは疑問。

「花」「月」は自然美の代表。「花」「月」「さかりに」「くまなき」を対比させ、「のみ」「かは」で強調した、簡明な一文であり、テーマと言うにふさわしいものである。後に、正徹と心敬が『徒然草』を世に

広めた時に引用したのもこの一文であることからその重要性がわかる。ただし、このテーマで、本段の最後まで一環して記述されてはいない。そういう意味では「テーマ（主題）」よりは「提言」とでも言うほうがより確かである。

2、「あはれに情ふかし」については、高い評価を示す表現かは検討の余地がある。

「あはれ」は「をかし」とよく比較される。「あはれ」は深い感動を表し、「をかし」は軽い興味を示すのが一般的である。すぐあとに「見所多けれ」とあり、後の「見所なし」との対比的表現があるので、高い評価と考えるにおいてよいだろう。しみじみと深い感動を受けていることを示している。

3、「歌の詞書」を引用しているのはなぜか。

「和歌的な伝統を踏まえた美の享受のありかたを肯定するからである。」（『徒然草研究と講説』^②）と考えるのが一般であり、従いたい。また「咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭」については、『古今和歌集』以来、春の部立の中において、桜が咲きはじめから、落花まで、歌材として扱われている、その感覚を生かした表現とみてよいであろう。（中略）桜は、満開の美ではなく、こういうふうに歌われるのが、伝統の世界であった。」（『徒然草の鑑賞と批評』^③）とも言われる。

4、「かたくななる人」とは、どのような人か。

「桜花の情趣を解せぬ人」（『徒然草全注釈』^①）とあるのに、訳としては従う。説明するなら、「伝統的和歌の世界を知らず、今にも咲きそう

な桜や、散りしおれた桜に対する評価のできない人」などとできよう。

※①そのものは、1の「提言」をもとに「かたくなる人」の無風流さに言及していると言える。

続いて②を検討する。

5、「万の事も、始め終りこそをかしけれ。」というテーマめいた一文は1とどういう関係にあるか。

「さかりの花・くまなき月に対比して『より次元の高い』美の世界として始と終りとが提示される」(『兼好とその周辺』⁵⁾)という把握は、やや飛躍があるが、肯定できる見解である。わかりやすくまとめれば、1の提言の「さかりの花・くまなき月」に対し、時間的にその前後にあたる状態を「始終り」とし、美の領域を広げたのが5である。「より次元の高い」がそのままではまるかどうかは、容易に結論できないが、方向性としては、認められよう。

6、「男女の情」の例は、典拠があるのかどうか。

『逢はでやみにし憂さ』を嘆いた歌、『あだなる契りをかこ』った歌をはじめ、『浅茅が宿に昔をしのぶ』歌にいたるまで、恋の歌はすべて、それらをうたうものであった。「鑑賞と批評」と言われるとおりである。典拠というよりは常識の域と言つてよい。

※②そのものは、1の提言をレベルアップさせたもので、①②ともに伝統的和歌の世界をふまえた兼好の主張と言えよう。ただし、②には物

語の世界も暗示される。

続いて③を検討する。

7、「千里の外」と表現した意味は何か。

諸注ともに「三五夜中新月色 二千里外故人心」(『白氏文集』)をあげる。『椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたる』月の光の発見は独自のものと見るべきであろう。ここには、和歌からはなれて歩みだした美的世界を見る思いがするのである。しかもそれが、『望月の隈なきを、千里の外まで眺めたる』という、白楽天の詩句『三五夜中新月色 二千里外故人心』を想起させる風景との比較において、うち出されていることは、まことに興味深い(『鑑賞と批評』)とある。『白氏文集』との比較において、独自の美的世界を描いているというとならえ方は、無理な推定ではなく、面白い。

8、「あはれなり」は高い評価を示す表現か。

後の「身にしみて」とほぼ等価の表現であろう。『白氏文集』との対比において、一つには「あはれなり」といい、もう一つには「身にしみて」というのであるから、積極的に高い評価と考えるべきである。

9、「身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ」の意味は何か。

「能因が『心あらん人に見せばや津の国の難波あたりの春の景色』と詠んだ呼びかけと同じく、この情緒のわかる人はわずかであろうという自負の念を、より多く考えるべきである。」(『鑑賞と批評』)とある。これに従いたい。兼好が能因と同等の感動を抱いたことは確かで、

自分を能因と同等の位置におくほど、自分の発見した美とその美意識に自信を持ったことが表現されているのは間違いない。

※③そのものは、漢詩の世界との比較による、自己の見いだした自然美とその獨創性（美意識）を表現している。

続いて④を検討する。

10、「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは」というテーマめいた一文は1とどういう関係にあるか。

「前に出た『花は盛りに』、月は限なきをのみ見るものかは」が、見る対象についての意見の提示であるのに対し、見方についての見解を強調した反語である。『全注釈』は、その通りである。また、「冒頭の『花は盛りに』に応じて結びとどめたもので、この段の三つの「かは」は、始、中、終と相對したものだが、ここのがもつとも重い（諸抄大成）。物を見るのに、眼前に見えるものだけを見るべきではないというのは、もつとも中世的な余情論に基づく発言である。」（『徒然草諸注集成』⁶）という見解がある。「ここのがもつとも重い」とは判断しかねる。ただ、「中世的な余情論」についてはそう見てもさしつかえはない。さらに、「月や花を目だけで見えるものではない、とは結局心の中に定着している花や月の姿を思いうかべて味わうことであろう。そしてその心の中のイメージは、実体験のみから成るものではなく、古典の世界を通じて形成されてきたものであるはずである。和歌や物語に描

かれた様々な情景と、過去に見てきた花や月のさまとが重なりあうからこそ、家にこもつていても、閨の中にあつても、花や月を生き生きと思いうかべることができるのである。ここでもまた、兼好にとつて古典の世界がいかに大きな意味をもつかを確認できるのであるが、一方古典の中から、また実体験の中から、好ましい自然の姿を選択してきたという意味で、兼好の美意識が、その自然像を深く支えていることを認めることができるのである。」（『徒然草講座第一巻』⁷）とある。後半部、「兼好の美意識」が、「古典の世界を通じて形成されてきたもの」で、それに加えての「実体験」から「好ましい自然の姿を選択してきた」ということであるなら、理解できる。テーマめいたこの一文は、1を受けて発展したものと考える。「対象から、見方へ」ということだ。11、「たのもしう、をかしけれ。」はどういった評価を表すのか。

「橘説は、『それからそれへと種々の想念が生じて、いつまでも興味がつきない、その心境をたのもしといったのだ』とする。この説がもつとも支持者が多い」（『諸注集成』）とある。「目のみにて見る」のは、単純な見方である。言わば平板なモノクロ写真を見ているようなものだ。それが、「春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながら思へる」こと、つまり心眼で見えるわけで、心中には、言わば立体画像がイメージとして幾重にも浮かんでくるわけだ。それを、「たのもし」かつ「をかし」と言つたので、この二語は対等であり、類義語でもある。二語が重なることにより、より正確に対象の把握が可能となる。「たのもし」の存在により、単に「をかし」というよりも、「期待される」と

いった、より細かい評価をプラスすることができる。一部の説にあるように、「たのもしう」が「をかしけれ」を修飾しているとは考えない。

12、「よき人」と「片田舎の人」はどういう人物のことか。

『よき人』と『片田舎の人』との対象はすでに、第七九段にもあった。ここでも、兼好は、都の『よき人』を賞揚し、『片田舎の人』即ち、都の周辺の田舎者をおとしめている。『全注釈』とあるが、そのとおりである。「よき人」は基本的には「身分・教養が高い人」のことで、

「兼好の有職故実についての判断は、見てきたように『よき人』の意見にささえられることが少なくない」『徒然草を読む』⁸とあるごとく、常に「よき人」の言動が、兼好の対象の判断の基準となっている。

13、「よそながら見るることなし」はどういう評価か。

「兼好の自然観照の態度を示すものとして重要である。『よそながら見る』とは、対象をわが物としてではなく、いわば主我的でなく、そのものとしてあるがままに、離れて客観的に見ることである。『全注釈』とあるが、単純明快に言えば「淡々と見る」ことが「よそながら見る」ことである。これは、具体的に言えば、直前にある「よき人」の「ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。」を意味する。それができないのが、「色こく」以下の「片田舎の人」の姿勢であり、両者は対照的で、兼好はもちろん「よき人」に軍配をあげている。

※内容的には、この④までが、大きな一つのまとまりとなっている。

①の「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」から始まり、②の「万の事も、始め終りこそをかしけれ」、③の「心あらん友もがな」を経て、④の「すべて、月・花をば、さのみ目にてみるものかは」に至るわけである。まとめれば、「月や花の美のあり方と見方」『徒然草講座第三卷』⁹となる。

続いて⑤を検討する。

14、「いとめづらかなりき」はどのような評価か。

『見し』『めづらかなりき』と過去の助動詞を用いているのは、兼好の具体的経験を示すものとして直接で効果的である。『めづらかなり』は、ここでは、軽蔑として書いているのであるから、珍妙である、珍奇である、風変わりであるぐらいに解してよいであろう。『全注釈』とあるが、そのとおりである。「めづらかなり」は兼好からは否定的な評価である。以下、「片田舎の人」の「葵祭を見物する乱雑ぶざまな情景を、揶揄するように描きつづける」『徒然草を読む』のである。

15、「ただ、ものをのみ見んとするなるべし」はどういう評価につながるか。

「行列そのものだけを見ればよいとするのであって、前後の様子や、漂う気分などを味わおうとする余裕がないというのである。『諸注集成』とあるが、そのとおりであって、片田舎の人の即物的な姿勢を否定しているのである。これは④の冒頭の「さのみ目にて見るものかは」を、当然ながら受けている。

16、「睡りて、いとも見ず」はどういう評価につながるか。

「都人で身分の高い人などは、居眠りしているような態度で、美美的行列をよく見ようとしなない」(『徒然草』¹⁰)に賛同する。「睡りて」は、実際に寝ているのではないだろう。もしもそうなら、否定的評価につながるのが普通である。これは「都の人」の、淡々とした見物の態度を高く評価している文脈であるから、「眠っているような態度」がよい。ついでながら、「いとも見ず」は、積極的に見ようという姿勢を示さないととらえたほうがよい。

※⑤そのものは、「片田舎の人」の、祭見物の「ぶざまな情景を、揶揄するように」描くことであつた。

続いて⑥を検討する。

17、「明けはなれぬほど」と「暮るるほど」は何を意味するか。

前者は「まだ夜があけきらないころあい」(『全集』)、後者は「日の暮れるころ」(『全集』)ということだ。これは『よろづの事も、始め終りこそをかしけれ』の精神が活きた説き方となっている。祭を見るのに、祭の日の『明け離れぬほど』に見る情趣、『暮るるほど』に見る情趣、それらを統合して、物の推移を発見するところに、この部分の一つの結論がある。『鑑賞と批評』という意見に従う。これを、「夜明けから、祭そのものを含み、日暮れまで」という一日の時間の経過をそのまま追ったものとしてはまずい。あくまでも「始め終り」

が「をかしけれ」なのが兼好の姿勢である。

18、「をかしくも、きらきらしくも」とはどのような評価か。

『をかし』は、趣向をこらしている、しゃれている。『きらきらし』は、光り輝くさまである。美しく飾つてある。(『全注釈』)とあり、「あるいは優美に、あるいは華美に飾りたてての意である」(『諸注集成』)とある。類似した二語を並立させて、華やかさをより細かく表現したものである。前に「たのもしうも、をかしくも」とあつたのと類似する。夜明けの祭の始まる前の情景につき、「美しく、はなやかだ」と評価する。それを受けて「つれづれならず」とあるのも注目される。

19、「あはれなれ」は高い評価を示す表現か。

日が暮れて、祭が終り、「目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしと思ひ知られて」を受けるので、兼好の言う「始め終りこそをかしけれ」の精神に合致する。「をかし」であれば、観念的・客観的であるが、「あはれなれ」ならば、実感的・主観的傾向を帯び、より感情が移入され、高い評価ということになる。本段の「あはれなり」と「をかし」の使い分けはそのようになっている。

20、「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。」の意味は何か。

「都大路の有様を見ているこそ、祭りを見ていることなのである」(『全集』)とあり、また「この一日の明け方から夕暮れまで、都大路のありさまのすべてを見るのこそ、本当に賀茂祭を見たということになるのだ。華やかな行列を見るのだけが、祭を体感することではない」(『徒然草』)ともある。前者が一般的で、後者は原文に補いが

あり、翻訳調である。後者の考えには賛同しがたい。それよりも次のような問題がある。「正徹本と常縁本⁽¹¹⁾では、『あはれなれと覚えたるこそ、祭見たるにてはあれ』と大きく変っている。」『全注釈』ことが問題である。正徹本と烏丸本を比較すると「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。」(烏丸本のほうが歯切れがよく見えるし、「大路見たる」というと、詩的な感じはする。しかしそれはあくまでも印象批評の域を超えていないし、説得力はない。私的な感想(意見ではない)を述べると、正徹本のほうが兼好の主張を明確にしていると思われるほどである。正徹本の見直しが図られてしかるべきかと思う。「烏丸光広本と正徹本は」一長一短ということで、総合的にみれば対等というところでしょうか。『徒然草抜書』⁽¹³⁾という発言を重く受け止めたい。

※⑥そのものは、⑤の冒頭を受けて、「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。」でまとめている。「祭の見方とその美のあり方」『講座第三巻』という把握でよいだろう。

続いて⑦を検討する。

21、「しばしも世をのどかに思ひなんや。」の意味は何か。

「しばらくでも、この世をのんびりしたものと思えようか。」「全集』、「ほんのわずかな間も、のんびりとしておられようか。」「徒然草』などがあり、反語で、兼好の強い主張がうかがえること、本段冒頭の「花はさかりに」と同様である。

22、「いとほかなし」はどのような評価か。

「世をそむける草の庵には、閑かに水石をもてあそびて、これを余所に聞くと思へるは」を受けている。「俗世間を隠遁した草庵の生活では、閑居して自然を賞玩し、死の到来を、まるで人の身の上のことを聞くように思っている」『全集』ことに對し、否定的に評価しているのである。

23、「閑かなる山の奥、無常の敵競ひ来らざらんや。その死に臨める事、軍の陣に進めるに同じ。」は本段の最末尾にあるが、冒頭のテーマとの関係はどうなるか。

冒頭のテーマ(「提言」のほうが適切だが)とは、「花はさかりに、月はくまなきを見るものかは」である。そこから⑥まで美的態度を一貫して述べてきた内容が一転して、死を凝視する内容となる。これは冒頭の一文を記したときから、意図していたことなのか、それとも連想の発展で結果的にそうなってしまったのか、どちらととるかにより、『徒然草』の本質も見直されることになる可能性がある。

※⑦そのものは、⑥の末尾「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。」に触発されて記されたことに間違いない。しかし、その内容は①～⑥までに比し、「しばしも世をのどかに思ひなんや。」や「その死に臨める事、軍の陣に進めるにおなじ」などとあるように「死」が中心となっており、過激である。本稿でもっとも考えたいのが、この⑦の位置づけである。

五 まとめ

初めに、『全集』の解説をあげておく。

「(1) 月や花の美しさを、満開や満月にだけ見ようとし、恋の情趣をその成就においてだけ感得しようとする素朴な態度に対して、まだ完成をみず、あるいはすでに頹落した情景において見ることに、またそれらの対象に埋没することなく、これを客観化し、いわば自己を制御しつつ、これをとらえることの、より高度な美的態度であることを、まず主張している。対象への相即・密着ではなくて、客体から自己を保留しつつ、逆に想像力を高揚する美的態度である。このような態度をとりえない粗野な「片田舎の人」の姿を描き出すことを媒介に、(2) 兼好の筆は一転して葵祭の情景とその推移を展開し、やがて祭の後の大路のさまに視点は集中し、(3) 人間にとって避けがたく根源的な問題としての、無常に到達するのである。(4) 叙述は上記のように展開するが、兼好の思想としては逆に、無常の確認が、月花にいたるまでの中世的な美観の成立をささえていることを知るべきである。」(頭注による。(1)～(4)は筆者挿入)

(1) が、本稿の①～④にあたり、(2) が、⑤～⑥にあたり、(3) が、⑦にあたる。なお、(4) は本段全体のまとめにあたる。本解説のごとく、本段は大きく段落に分ければ、(1) 第一段落(2) 第二段落(3) 第三段落、となる。これが一般的な捕らえ方であり、内容的にも、肯定できるまとめ方である。

これら一連の流れには、いくつかのキーセンテンスが存在する。それを次に記述順に掲げる。

「花はさかりに、月はくまなきを見るものかは」(①)

「万の事も、初め終りこそをかしけれ」(②)

「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは」(③)

「ただ、ものをのみ見んとするなるべし」(⑤)

「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」(⑥)

「しばしも世をのどかに思ひなんや」(⑦)

これらは、主観的な言い方になるが、適度な長さで、主張としてまとまっている。こういう文は、本段に限らず、本作品全体に見られる傾向である。ただし、このキーセンテンスには一つ問題が含まれていた。それは、「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。」(光広本)の一文である。これが正徹本だと「世のためしも思ひしられてあはれなれとおぼえたるこそまつり見たるにてはあれ。」となっており、適度な長さとは言えなくなる。本稿ではこれ以上の追求は避けるが、光広本と正徹本の相違点については今後、詳細に検討されなければならないと考えている。

本稿の目的は、137段の内容を問い、その分析をし、判断することである。先学は異口同音に、『徒然草』の本質、兼好の美意識を考えると、絶対避けて通れないのが本段だ、と述べている。その骨格をなすのが、冒頭の「花はさかりに」(①)の一文である。ところが続く②から文が進むにつれて連想の発展が見られ、最後の⑦にいたっては、「冒頭部分の、和歌的なものをふまえた発想・修辭の数々から展開してきた、そ

の果てに到達したところの間隙の大きさに目を見はらざるを得ない。」
 『鑑賞と批評』と言われるほどだ。本段の最大の問題は、⑦をどう位置づけるかということである。

以下、先学の見解を列挙する。引用文中、()内はすべて筆者の挿入。

1 「この第六段落（本稿では⑦にあたる）は、前の部分への添加や突然の変化ではなくして、その表現を支えている根源的、根底的立場の自覚であり、それへの還帰であると言うことができる。（中略）本段の主題は、『無常の世におけるものの情趣のあり方とその味わい方』である」『全注釈』

2 「（西尾実説は）叙述からいえば、余情論から無常観へであるが、それは無常観を基底においた余情論だとみなしなければならぬとされる。（中略）兼好の歌論と無常観とが、死の瞑想の上に成立し、幾たびも考えあわされた末に、こうした立論となったものであつて、かの正徹の賛詞も決して過賞ではなかったことが認められると思われる。」（『諸注集成』）

3 「この章段（137段）は、最初、花と月という素材を扱って兼好が自分の美意識を表明するかに見えるが、次には、それらを見る人の心のあり方に触れて行く。そうしてその人の心の中に、死の自覚のあることをのぞましいこととして、結論をみちびいて行く。これはまさしく、芸術的なものと宗教的なもの、それを統合する人間の現実生活のあり方に関して、三者が一体であることを示している。宗教的かつ芸術的生活、それを精神面から現実の中に実現しよう、という方向が、結局、兼好ののぞむ方向だったのである。」（『鑑賞と批評』）

4 「この第三段落（本稿では⑦にあたる）では、第一・二段落（本稿では①～⑥にあたる）で追求された美感と美意識、つまり美学の問題が全く排除されていることであり、それに代わって無常に迫られている人間、つまり無常との対話が自己の切実な課題として緊張した姿勢で提示されている。」（『兼好とその周辺』）

5 「兼好は第七段で、『世はさだめなきこそいみじけれ』という思想を提示したが、その思想の内実がこの章段において具象的に展開され、よりよく形象化されたのではないかと私説では考えている。換言するならば、兼好の美意識はその無常観そのもののなかに形成されているのである。（中略）「いみじ」として心ひかれる「さだめなき」、「あはれ」を可能にする無常と、「無常のかたき」として自覚される無常とのほざまで覚えた兼好の心情が素直に表出されたのである。」（『研究と講説』）

6 「兼好の自然観と美意識の関連を示すものとして引いた一三七段も、無常の認識を示す言葉で結ばれている。このことは、始終の美の称揚も、すべてのものの変遷への思いに支えられていることを示し、美意識の底にも無常観が流れていることを知らせる。」（『講座第一巻』）

7 「前半部（本稿では①～⑥にあたる）の美の世界と、後半部（本稿では⑦にあたる）の死＝無常の世界が結びつくのは、従来の説のように、単純に、美を死が支配しているという説明からでは理解できない。この前半と後半部は、共に不在について語っており、その不在性がこの二つの部分つまり一三七段全体に一貫する主題であるからに他ならないのである。」（『講座第三巻』）

以上、代表的な先学の、137段の構成、特に①～⑥対⑦の関係に対し、論じている部分を取り上げた。各論ともに、表現は異なるが、総じて⑦が唐突に出現したものではない、という方向性であることがわかる。ただし、4の「美学の問題がまったく排除されている」という見解には要注意である。今は「排除」を「無関係」の意として受け取らないで置く。

「本書の傾向として」和歌的なものから生活感情的なものへと、思考の推移がある。この第一三七段は、それがもう少し意識的になされているように思える。『鑑賞と批評』という見解には興味が引かれる。これに従えば、⑦は突発的に出現したものではないということになる。

「兼好は、書くことのみに実存し、書くことのみが兼好の世界となる」と言えよう。徒然草のあの序段は、それ故、この作品にとつて決定的な意味を持ち、兼好の意識構造とのかかりとして、捉えなおさなければならぬはずである。『講座第三巻』という三谷の論は面白い。序段とは、周知の「つれづれなるままに、日くらし、硯にむかひて、心につりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」『全集』のことである。序段は全体の方向性を示すものとして看過できない。下巻の冒頭の137段と同様に重要である。注目したいのは、「そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」の部分である。ここで、唐突だが、次のような文を引用する。『自分たちの心のなかにある思い』というようなものは、実はことばによって『表現される』と同時に生じたのです。と言うよりむしろ、ことばを発したあとになって、私たちは自分が何を考えていたのかを知るの

です。』『寝ながら学べる構造主義』⁽¹⁾ということが言えるならば、三谷の見解とも重なることになる。まさに「あやしうこそものぐるほしけれ」という兼好の気持ちはそれと同じではないか。その考えを本段の分析にも応用し、まとめてみたい。

①の「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。」と記した、それはまさに和歌という古典を背景にした美意識の表現であるが、そこから②の「万の事も、始め終りこそをかしけれ。」が導かれる。私見だが、この文は、本書最末尾の段(243段)の、父への「仏問答」と関わりがあると、考えている。

この②は和歌から物語という古典を背景に置く。それを受けた③では漢詩を対極に置き、兼好自身の、体験による美観が述べられる。さらに④の「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。」と美意識の手法へとつながり、そこで、「よき人」対「片田舎の人」が、「片田舎の人」の行動を中心に無風流な人間の愚かさ描かれる。

さらにダメを押すように⑤の祭りの内容へとつながる。この祭の様を兼好が実体験したことは、回想の助動詞「き」の存在により明らかであり、この体験が兼好に本段を記させるきっかけになったのだと強調しておきたい。⑥は、祭のよきは「始め終り」だと、②を具体的に反芻する。ところが兼好の筆はそこでとどまらなかった。その原因は段落末の「目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしと思ひ知られて、あはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」という文を記したことにある。繰り返しになるが、この部分、正徹本とは大なる相違があり、これ

は今後の検討課題である。

それに続く⑦の冒頭も実体験による発見で、とくに「この人みな失せなん後、我が身死ぬべきに定まりたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。」はそれに触発された考えである。そこから身近にある「器」から漏れる水が「尽きぬべし」ことにより、「しばしも世をのどかには思ひなんや。」へと続く。この部分は「花はさかりに」を記し始めたときにはまだ脳裏をかすめてもいないことではなかったか。身近な遊び「ままだて」を経て、最後は「兵の軍に出づる」ときの死を覚悟した姿勢から隠遁者への提言が記される。

結果的にだが、兼好は「しばしも世をのどかに思ひなんや。」をもっとも強く主張することになった。前述の、三谷の、兼好が「書く」ことについての見解は卓見であり、賛同したい。

結論すれば、兼好が「花はさかりに」と書き出した、その背景には、愚かな田舎者の祭見物という実体験があり、さらに根底には、「死」を常に考える彼の「人生観」があったのである。これを即、「無常観」と結びつけるのがよいかどうかは今後の課題としたい。「しばしも」の一文は、世の中の人びとへはもちろん、自分への戒めになっているのである。

なお本稿では、『徒然草』研究の第一人者とも言える西尾実、永積安明、両氏の論について、深く触れることができなかった。これも今後の課題としたい。

注

- (1) 『徒然草』『日本古典文学全集』小学館・永積安明校注・訳・鳥丸光広本を底本とする。以下『全集』と呼ぶ。
- (2) 『徒然草 研究と講説』(桜楓社・佐々木清)。以下『研究と講説』と呼ぶ。
- (3) 『徒然草の鑑賞と批評』(明治書院・桑原博史)。以下『鑑賞と批評』と呼ぶ。
- (4) 『徒然草全注釈下巻』(角川書店・安良岡康作)。以下『全注釈』と呼ぶ。
- (5) 『兼好とその周辺』(桜楓社・藤原正義)。
- (6) 『徒然草諸注集成』(右文書院・田辺爵)。以下『諸注集成』と呼ぶ。
- (7) 『徒然草講座第一巻』(有精堂・「兼好の自然観」大島貴子)。以下『講座第一巻』と呼ぶ。
- (8) 『徒然草を読む』(岩波書店・永積安明)。
- (9) 『徒然草講座第三巻』(有精堂・「徒然草の鑑賞」三谷邦明)。以下『講座第三巻』と呼ぶ。
- (10) 『徒然草』(筑摩書房・島内裕子)。
- (11) 「正徹本と常縁本」は流布本の「鳥丸本」に対し、異本と呼ばれる。
- (12) 「鳥丸本」は「鳥丸光広本」とも「光広本」とも呼ばれる。本稿では『全集』にならって「鳥丸本」と呼ぶ。
- (13) 『徒然草抜書』(講談社・小松英雄)。小松は「光広本」と呼んでいる。
- (14) 『寝ながら学べる構造主義』文春新書・内田樹。引用文はソーシャルの考えを内田が簡明に伝えた部分。